

巡礼学びのプログラムについて

An Essay on the Pilgrimage Research sponsored by COC+

林幹¹・藤田優也²・尾藤大喜³・吉永進一⁴

Motoyuki HAYASHI, Yuya FUJITA, Daiki BITO and Shin'ichi YOSHINAGA

1.はじめに

COC+の一環で 2015 年度よりはじまった「巡礼、学びのプログラム」は、聖地と巡礼という宗教文化を通じて地元舞鶴の歴史や文化をより深く知ることを目的としていた。このプロジェクトを思いついたのは、ひとつには、聖地や巡礼の研究が宗教学内部で盛んになっていたので、そうした最新の研究を学生に紹介するよい機会になるであろうし、聖地研究はアニメの聖地やパワースポットなどで、狭い意味の宗教を越える広がりがあり、学生諸君にとってもアプローチしやすいと思われたからである。もちろん、最大の理由は、日本最古の巡礼道といわれる西国三十三所の第二十九番札所、松尾山が舞鶴高専の裏山、青葉山にあり、名誉住職の松尾心空師には高専食堂棟の揮毫をお願いするなどの関わりがあったことである。個人的には、心空和尚との交流を通じて高専周辺の丹後・若狭の仏教伝統の奥深さを知ったことや、あるいは西舞鶴旧市街の地蔵盆のような興味深い宗教民俗を知ったことが動機となり、地元の豊かな宗教文化を発掘し、学生諸君と共有したいと思い、このプログラムを企画した。また、2015 年度から学術振興会特別研究員として本校に赴任した栗田英彦氏は、元々巡礼宗教の研究を手がけた経験があり、このプログラムの強力な援軍となるはずであった。しかしながら、2015 年の後半からは私の体調不良でなかなか予定を進めることができなかった。また、栗田氏は学振の中途で舞鶴高専を離れて南山宗教文化研究所へ移るなど、さまざまな悪条件が重なり、最初の目論見通りに進んだとはいひ難い。とはいえ、この 5 年間はそれなりに実りの多いものであった。ここでは、今後の教育や研究に資することを期待して、5 年間を振り返り、そして最後に舞鶴の宗教についての雑ばくな感想を述べておきた

い。

なお、以下の内執筆担当は、1、2、4 が吉永、3 が尾藤、藤田、林の共著である。

2.プログラムの実践内容

2.1 概要

本プログラムの実践は、以下の四つの活動を柱とした。(1) 外部講師による講演会やシンポジウムの実施、(2) チャーターしたバスによる「聖地」の実地見学、(3) 5 年生の選択授業「現代社会と宗教」においてテーマ別の調査を行う。毎年一度、このプログラムに関連したレポートを提出してもらう、(4) その他、クラブ活動や英語プレゼンテーションコンテストを利用して、「聖地と巡礼」についての調査や考察を深めてもらう。

プログラムの発足当初の予定と異なり、(4)よりも(3)に重点を置く形になった。授業での強制的参加は、従来、自発的な興味をかき立てるという点ではほとんど効果なかったので、あまり期待はしていなかったが、授講者の中からも興味深いレポートが出てきたのは嬉しい誤算であった。

2.2 2015 年度、2016 年度

2015 年度と 2016 年度は、プログラム遂行用の機器や資料などの購入や、「現代社会と宗教」の授業での西国三十三所についての学習などでほぼ終わるが、購入した巡礼や聖地に関する書籍は、その後、英語プレゼンテーション作成用資料や「現代社会と宗教」の授業で活用されることになる。

2016 年度は、当初公開シンポジウムの実施を予定していたが、これは諸般の事情で翌年に延期になった。一方、11 月 13 日（日）に奈良高専で開催された第 10 回近畿地区英語プレゼンテーションコンテスト、プレゼンの部では、電気情報工学科 3 年太田航介くん、電子制御工学科 3 年岡部武琉くん、電子制御工学科 3 年藤村和成くんが「Why do People Make a Pilgrimage?」と題する発表をおこない、松尾寺から、観光業、サ

1 舞鶴工業高等専門学校建設システム工学科 5 年

2 舞鶴工業高等専門学校電子制御工学科 5 年

3 舞鶴工業高等専門学校電気情報工学科 5 年

4 舞鶴工業高等専門学校人文科学部門教授

ブルカルチャーまでを含めて、巡礼をテーマにした発表を行った。また電子制御工学科4年生の奥村悦理くんが、MMR (Multi-Media Research)というクラブ活動の一環で松尾寺紹介のビデオを制作して高専祭で公開したことも特記しておきたい。

2.3 2017 年度

7月1日に舞鶴西市民プラザ、7月2日に松尾寺で、二日連続の「巡礼と聖地：その伝統と現代」と題する公開シンポジウムを開催した。発表者と発表題目は、松尾心空「松尾寺と西国巡礼」、出口三平「綾部という近代の聖地」、岡本亮輔（北海道大）「偽物がつくる本物の場所—青森キリストの墓を中心に」、中川未来（愛媛大）巡礼「海を渡った四国靈場：植民地台灣の四国八十八ヶ所写し靈場」、矢ヶ崎善太郎（京都工織大、現在大阪電通大）「松尾寺の建築」、岩本馨（京都工織大）「西國三十三所巡禮者」である。

「四国三十三所順路考」である。心空師は、その人柄と説教と文章で、舞鶴内外に信奉者が多く、徒步巡礼復活の取り組みを進めてきたことでも有名である。出口氏は、現在は在野の大本教研究者で、いくつかの学術研究に協力してきた。岡本氏は、2013年に『聖地と祈りの宗教社会学—巡礼ツーリズムが生み出す共同性』

(春風社、2012) で宗教学会賞を受けた俊英であり、巡礼研究の第一人者といえる。中川氏は近代史研究者で、現在は四国遍路・世界の巡礼研究センターに属して、巡礼研究、遍路研究を進めている。矢ヶ崎氏は茶室などの日本の伝統建築の研究家で、岩本氏は日本の都市史を専門として、巡礼や靈場についても研究をしている。

発表の概要は以下のようなものである。松尾氏の発表は、二九番札所松尾寺住職として、西国巡礼に関わってきた経験を通して、巡礼における再生体験を語ったものであり、出口氏は、近代の綾部における、大本教や、キリスト教の影響を受けたグンゼ創業者の波多野鶴吉などの例をあげて聖地性を論じた。岡本氏の発表は、青森県新郷村において、キリストの墓伝説がいかに地元の観光行政と結びつき、人々の意識にもどう根づいたのかをフィールドワークから分析したもので、中川氏は、植民地期に台湾に建立された「写し靈場」の過去と現況について、精緻な報告を行った。矢ヶ崎氏は、享保 15 年に完成した本堂の特徴をまとめた上で、近世社寺建築の時代性と地域性を指摘し、岩本氏は「西国三十三所順路考」と題して、最古の順路記録とされる『寺門高僧記』における覚忠の巡礼（1161）を取り上げ、宗教的というよりも政治的な意図が隠れていることを指摘した。

専門性の高いシンポジウムであったので、どれほどどの聴衆があるか心配されたが、舞鶴高専学生、

舞鶴地元の歴史愛好家だけでなく、遠く韓国や東京、大阪からの参加者も迎えて、それぞれ45名、20名の参加者があり、まずは盛況であった。アンケートでは「地域と宗教という今まであまり丹後では考えられていなかったことが取り上げられた」「工業高専主催でこのような人文学の深い内容のシンポが行われることにたいへん意義があると思いました」などの声が寄せられており、第一線で活躍する研究者たちを招聘した意義はあったかと思う。

この年には学生諸君の研究成果もあった。ひとつは「現代社会と宗教」のレポートで、グーグルマップを利用した近隣の地蔵の調査という秀逸な研究があったことである。電気情報学科 5 年兼田佳典くん、永島智寛くんの調査で 30 近い地蔵の分布を調査したものである。

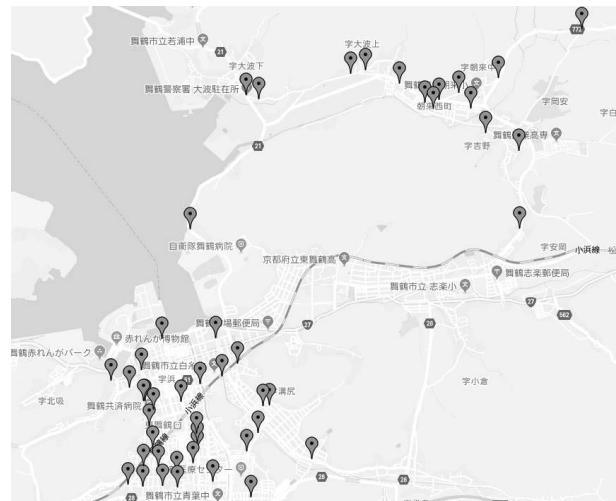


図1 舞鶴高専近辺地蔵分布図

さらに印象的な成果は、11月12日（日）、神戸研究学園都市・大学共同利用施設 UNITY にて開催された第11回近畿地区高等専門学校英語プレゼンテーションコンテストのチーム部門で、電気情報工学科3年尾藤大喜くん、電子制御工学科3年藤田優也くん、建設システム工学科3年林幹之くんが、「Unraveling the Mystery of a Haunted Spot in Maizuru」と題する発表を行ったことである。彼らは舞鶴高専近くにある廃墟「ロシア病院」をとりあげ、その歴史を掘り下げながら、どのようにして心霊スポットが生まれるのかを分析する内容であった。現代聖地研究の特徴は、宗教以外の聖地、あるいは伝統からはずれる聖地を対象にする点で、秋葉原や鷺宮神社などのオタクの聖地についての研究もなされており、その最先端に位置する研究者が岡本亮輔氏である。2018年のプレゼンチームは、彼の著書『聖地巡礼』や都市民俗学などを参照しつつ、ロシア病院の現代的な「聖地」性を論じる内容であった。

そのプレゼンテーションは聴衆に十分に理解されたとはいひ難いが、斬新さという点では群を抜くものであった。英語のプレゼンをもとに作製された日本語記事を次章に掲載してあるので、ご覧いただきたい。

2.4 2018 年度

11月17日（土）、西市民交流プラザを借用して馬場紀寿「釈宗演のセイロン留学——伝統知と近代知のはざまで——」と題する講演会を開催した。馬場氏は初期仏教の研究者で、岩波新書から『初期仏教 ブッダの思想をたどる』（岩波書店、2018）を出版するなど精力的な活躍をされている。今回は、日本では数少ない釈宗演専門家としてご講演いただいた。

この講演会を開くに至った経緯を書いておきたい。当初、この年度では「近い聖地、遠い聖地」というテーマでシンポジウムを開き、それに向けて学生の研究調査を進める予定にしていた。近い聖地として西舞鶴の地蔵盆をとりあげ、遠い聖地については、明治維新後、天竺（インド）を目指した釈宗演と釈興然の二人の日本人仏教僧をとりあげるはずであった。地蔵盆については専門家の都合がつかなかったこと、さらに最初に予定していたシンポジウムが台風で順延した結果、馬場氏だけの講演会となってしまった。

釈宗演は、高浜町出身の臨済宗僧侶で、夏目漱石なども弟子入りしたことで知られ、明治時代最も有名な禅僧であり、慶應大学で学び、スリランカへ留学し、アメリカへの二度の講演旅行など国際的な活躍をした仏教者でもある。2018年は、彼の百年遠忌にあたり、鎌倉の円覚寺、慶應大学、そして高浜町などで盛んにイベントが行われているので、学生諸君が調査する上でも都合のよい年であった。

もともと、若狭から丹後にかけては、古代の密教文化が栄えた地域である。小浜の神宮寺（天台宗）、明通寺（真言宗御室派）から宮津の成相寺（真言宗）まで密教の古刹が多く、舞鶴にも松尾寺、金剛院、多禰寺、円隆寺などがある。舞鶴高専に最も近い二つの寺院——天竺へ渡ろうとしてマレーシアで亡くなった高岳親王の創建と伝える金剛院、江戸時代、悉曇学（サンスクリット）を研究した等空上人がいた松尾寺——の歴史が示すように、この地域には、仏教を輸入するだけでなく、仏教の源を求めて外へ出て行く人々の伝承もある。近代になって改めて仏教の原点を求める運動が起こる。釈宗演がスリランカへ向かったのも、こうした近代以前の求法の旅、聖地巡礼の伝統があったのではないか。こうした文化を学生諸君や一般の方にも感じてもらいたいという意図で、本年の講演会を企画した。

馬場氏の発表は、大変内容の濃いものであった。仏教の原点を求めてスリランカに留学した釈宗演のパーリ語学習の苦闘から、仏教広宣のための渡米とシカゴ宗教会議での演説まで、その半生を、仏教学者の視点から分析したもので、釈宗演への敬愛の念がこもった熱い発表に学生諸君も深い感銘を受けていた。聴衆の数は決して多いとは言えなかったが、第一線の研究者と質疑応答できるという贅沢な時間を持ってもらったのではないかと思う。

さらに、1月16日（水）5、6時限目に、インド人非常勤講師で日本現代文学研究者のアンド・サンチットさんによる「天竺から見た日本」という題目で講演をいただき、逆にインドから見た日本の姿について補足していただいた。

2.5 2019 年度

この年度は、前年度が「遠い聖地」になったので、「近い聖地」をテーマとした。私自身の近い聖地についての「発見」は後述するが、本年は、舞鶴の手近な聖地として、近世以前より舞鶴の人々の参拝地に選ばれる大江町の元伊勢神社についての講演会と、松尾寺、そして西舞鶴の寺社へのイクスカーションを行った。

講演会は学生対象のもので、5月29日本校第1合併教室にて開催された。演者と題目は、廣瀬邦彦「江戸時代の元伊勢周辺ガイドブック『西国巡礼略打道中記』（1820）を読む」である。廣瀬氏は西舞鶴高校の教諭で舞鶴地方史研究会員、山城の研究を専門にしているが、今回は江戸時代の巡礼道中記についてご講演いただいた。

この道中記は、舞鶴の糸井文庫所蔵のもので、大阪の町人の手になる自筆で絵入りの記録である。略打とは、西国三十三所巡礼で二十五番から二十七番の順番を変え、大江の元伊勢神社に立ち寄るコースをいう。道中記は巡礼の日常生活がうかがえるもので、宗教的な行というよりも、観光と化していた様子がわかる。今回は特に元伊勢、成相寺、松尾寺の部分を選んで解説していただき、身近な地名だけにたいへん興味深いものがあった。

2019年度第1回イクスカーションは、5月22日（水）に開催し、受講生21名が松尾寺を見学した。松尾心空和尚より寺の成立、巡礼の意義など、三〇分ほどお話をうかがい、同寺所蔵の国宝や重文を拝観した後は本堂など敷地内を見学して回ることができた。意外にも学生たちのほとんどが、高専の裏山にあるこの寺院を訪れたことがなく、いくつも打ちつけられた巡礼の札に残る歴史の重みと、北近畿の峰々を見晴らす絶景に感嘆していた。

なお、松尾寺には「絹本著色普賢延命像」という舞鶴唯一の国宝が所蔵されているが、これは明

治35年という極めて早い時期に国宝指定を受けている（国宝制度は明治30年に発足）。未詳であるが、フェノロサと交流があった官僚で、熱心な在家仏教者として知られた河瀬秀治は宮津藩の藩士出身であった。これが松尾寺の国宝指定に影響を及ぼしているかどうかは、いずれ検討されるべきだろう。

2019年度第2回イクスカーションは、12月18日（水）に開催、西舞鶴の引土地区にある桂林寺（曹洞宗）、本行寺（法華宗真門流）、円隆寺

（真言宗御室派）をめぐった。本校の学生は、舞鶴以外から来ている者も多く、彼らにとって西舞鶴はまったくなじみのない土地であり、同じ市内でありながら卒業まで一度も西舞鶴を訪問せずに終わることもある。寺院や町屋のならぶ通りを歩くことで、田辺藩の城下町、北前船の寄港地として栄えた近世の風情を感じてもらいたいという狙いもあった。また、これらの寺院は、愛宕山の山裾をめぐるように並んでおり、おそらくは愛宕山という聖地が先にあったと想像される。学生諸君には、山の聖地と平地の俗世間との対照を実感してもらい、たいへん貴重な機会となった。

学生諸君からのレポートでは、以下の三つが優れていたので、その概略を紹介しておきたい（順不同）。

（1）「戦争宗教遺跡」

電子制御工学科5年 藤田優也

電子制御工学科5年 平井大輝

舞鶴市内には兵器を飾る神社がいくつかある。この報告では、1西舞鶴の京田の幸谷神社の奥宮脇に置かれている砲弾、2笑原神社の奥にある忠魂碑横の砲身、3中舞鶴、余部にある若宮八幡神社に置かれた日清戦争の水雷艇の外板、4東舞鶴の与保呂にある忠魂碑両脇におかれた砲弾の4カ所を調査した。1については、村松俊夫『舞鶴ふるさとのやしろ』（村松俊夫、1992）に記述があり、幸谷神社は手力雄神を祀ったもので、砲弾は勇壮な手力雄神にちなんで大正13年に海軍からもらったものであり、3の神社に置いてあるものは、1894（明治27）年威海衛の海戦に於いて敵弾を数十個所受けた水雷艇の砲の外板の一部であるという。

（2）「青葉山をめぐる馬頭観音」

電気情報学科5年 渡邊紘矢

電気情報学科5年 藤原雅也

電子制御工学科5年 宮下康平

馬頭観音は松尾寺の本尊だが、若狭側にも本尊としている馬居寺、中山寺がある。中山寺は修驗の泰澄が白山権現を勧請して建てたもので、その後、天台宗の覚阿が寺名を一乗寺と改めて、馬頭観音坐像を本尊として再興したもので、室町時代

になって中山寺と改名されたという。馬居寺の創建は伝承ではさらに古く、飛鳥時代、聖徳太子によると言われている。

本レポートは、特に若狭側の二ヶ寺を調査したものである。馬居寺の馬頭観音は江戸時代の修理で塗料が塗り込められ、平安時代の仏像ということが分からなかったという。また、松尾寺は「京都府舞鶴市字松尾 532」、中山寺は「福井県大飯郡高浜町中山 27-2」、馬居寺は「福井県大飯郡高浜町馬居寺 3-1」にあり、この字名を寺領と考え、Google Map や土地の面積を計算できるサイト（高精度計算サイト - Keisan - CASIO）によって調べてみると、松尾寺は約 130ha、中山寺は約 80ha、馬居寺は約 100ha であり、広い土地を所有していたと推測される。レポートでは、これら三ヶ寺の縁起は、海からきた異人の介入など共通するモチーフがあり、馬、海、異人という三点から考えると、日本に到来した騎馬民族の末裔で海を通じた交易で財をなした集団ではないかと推測されている。

（3）「岩室稻荷神社」

機械工学科5年 北野広恵

電気情報学科5年 森州寿子

本校の最寄りのJR駅、松尾寺駅の近く、舞鶴市吉坂百三十八番地に岩室稻荷という神社がある。今回の調査では、神社の宮司氏よりその由来と歴史をうかがってきた。伏見稻荷より勧請して江戸時代に創建され、舞鶴、田辺藩と若狭の国の信者の援助に支えられ、特に漁業と養蚕の関係者に信者が多かったという。普請、井戸掘りなどの方角判断をかつては行っていた。明治15年に生まれた森本太郎太夫が、この神社の中興の祖となる。太郎太夫氏は、宝珠の揮毫に優れ、彼のお守りは非常に人気があり、その精神講話は海軍軍人のファンも多かった。中風を直す方法を開発し、「病気を早く快方にする養生法」と題した本を刊行、毎年白米一斗を貧しい人たちに与える、「稻荷市場」を設立するなど、多方面に活躍した。この神社には、その太郎太夫氏の関連資料が所蔵されているが、軍艦乗組員の書簡、軍艦内に祀ってあった神棚などが保存されており、戦争遺跡という側面もある。

2.6 小結

2回の公開シンポジウムは外部からの評価は良好であった。とりわけ2017年度のそれは、舞鶴という不便な場所で行ったシンポとしては成功であった。学生諸君がどれだけ吸収できたかという疑問は残るもの、人文学研究の最前線を知ることによって、分からなかったという印象を含めて、彼らの伸び代になると期待している。

もう一点は、一般教養として、寺社に触れる機会を作ることができたことである。普通高校であれば、修学旅行での寺院訪問など、伝統的宗教文化に触れる時間がある。本校の場合、研修旅行は海外旅行で海外の大学との交流を目的として実施されている。また、就職重視の観点から、キャリア教育や就職対策に時間が割かれているので、そうした伝統文化に触れるような行事は存在しない。2019年度では、松尾寺では、寺を見ただけなく住職の話を聞いて宝物を拝観し、西舞鶴では歴史的な都市空間を実地で触れることができ、2018年度では、釈宗演のような地球規模で活躍した実例を知ることができた。宗教文化に、単に観光のレベルだけでなく、それを越えたレベルで接することができたと思う。

反省点としては、学生の主体的な調査、研究を期待したが、積極的なものとはならなかった。高専のカリキュラムでは高学年でもかなり時間割が詰め込まれており、学期の間は進学、就職、卒業研究などによって意外に時間がとれないこと、また長期休みには地元に帰省する学生も多く、長期休みに舞鶴を調査することは非常に難しい。実質的に、学期内の休日を潰して調査してもらうしかないので、時間不足に終わることが多い。その中で、上記のような発見があったのは大変嬉しいことである。

3 「ロシア病院の謎」

以下に紹介する文章は、英語プレゼンテーションコンテストのために作成された文章をもとに発展させたもので、それを私(吉永)が表現などを削除して整理したものである。

「ロシア病院の謎：心霊スポットの聖地性」

電気情報工学科5年 尾藤大喜
電子制御工学科5年 藤田優也
建設システム工学科5年 林幹之

私たちが過ごしている舞鶴高専の周辺は森で囲まれており、しばしばクマなどの野生動物も見かける。また、野生動物だけでなく、この森の中には戦時中に建てられた古い建築物の廃墟が存在する。この建物は、舞鶴高専の学生達に「ロシア病院」という名称で呼ばれており、心霊スポットの一つとして周辺の学生の肝試しなどによく利用されている。また、インターネット上でもこの名称は有名になりつつあり、学生以外の年齢層の人々が増えている。

以下に「ロシア病院」の概要を述べていく。
場所は、ご存知のように舞鶴高専の北に位置し、「第三火薬廠跡」としてすでにグーグルマップにも記録されている。コンクリート建築物の廃墟が並び、不気味な雰囲気がただよう。この「火薬廠

跡」は、戦争遺産としてはすでに市民によるたいへん貴重な調査報告(関本長三郎『住民の目線で記録した旧日本海軍第三火薬廠』(出版センターまひつる、2005)、あるいは舞鶴高専教員による共同研究が存在する(牧野雅司、毛利聰、今村友里子「海軍第三火薬廠汽缶場跡の発掘」『舞鶴地方史研究』49号(2018)所収)。

この遺構はロシア病院と名付けられて、以下のような怪談が流布している。

戦時中この建物では日本人に朝鮮人捕虜が強制労働をさせられていた。しかし、彼らに与えられていたわずかな食料と、それに見合わない過酷な労働内容により、多くの捕虜が亡くなってしまっていた。そして、恐ろしいことに彼らの死体はセメントに混ぜられ、「ロシア病院」の壁に塗りこめられてしまったと言われている。他にも、「ロシア病院」では戦死者の幽霊が現れるという怪談もある。その幽霊の正体は、戦時に日本の海軍が生産した人間魚雷に搭乗し、その後帰ってこなかつた人たちの無念が形になったものだと言われている。

ただし、この怪談の原型は創作であり、作った人名もわかっている。本校の社会科教授であった戸祭武氏である。

「高専が発足して暫くのあいだ、私(=戸祭)は学寮の運営と補導の仕事を担当した。第一回生が二学年を迎えることになった。そこで新一年生のために面白い話をつくろうということになり、寮生有志と私は冗談半分に「怪談」をつくった。・・・その創作怪談のひとつに校舎周辺のトンネル工場のあとに、戦時中につれてこられた朝鮮人労務者が衰弱死したあと、死体処理を手軽にすませるために、コンクリート壁にそのまま塗りこめられてしまったので、雨のふる夜更け、近くを通りかかるとうめき声がきこえ、コンクリート壁に人のかたちをした影がびっしょり水にぬれて現れてるというのがあった。数ある怪談話の中では、もっとも本当らしいと評判になった。」(戸祭武「第三火薬廠概説」『住民の目線で記録した旧日本海軍第三火薬廠』3頁)。

とはいって、それではなぜここがロシア病院と呼ばれるようになったのかは述べられていない。命名者も命名の理由も不明であるが、「病院」と「ロシア」という名称の意味を、間接的に探ってみたい。

舞鶴には、海軍の艦隊に対して指令を下す重要な役割を持った鎮守府が作られていた。この鎮守府はロシアの艦隊に対抗することを目的として建造されていた。舞鶴引揚記念館では、海外の各地から引揚された人たちの歴史とシベリア抑留についての記述が残されており、歴史の闇である

戦争の残虐性を忘れないようにすることを目的としている。引揚とは、日本の植民地や占領地に住んでいた日本人、そして、外国で捕虜となってしまった日本人を、船を用いて日本へ戻すことである。調査の結果、舞鶴港ではロシアに抑留されていた日本人を、多数引揚していたことが判明した。このロシアによる日本人の抑留は、シベリア抑留とも呼ばれている。これは、当時ソ連と呼ばれていたロシアが、第2次世界大戦中に降伏、逮捕した日本人をシベリアへと送り強制労働させたという歴史における一つの事柄である。シベリア抑留では、寒く、飢餓に襲われる大変惡環境の中で強制労働させられたことにより、多くの日本兵が亡くなっている。

上記のことから、舞鶴にとってロシアの関係の深さが分かる。

それでは、「病院」という名の意義はどこにあるか。今回の調査の中で、ロシア病院との比較対象として取り上げたのは、京都府八幡市にある「軍人病院」と呼ばれる廃墟で心靈スポットとされている。

この廃墟を選定した理由は、ロシア病院と軍人病院には、名前に戦争を連想させる軍人という単語と、病院という単語を含んでいることであり、そして所在地が京都府にあるので調査しやすいからである。

軍人病院とは京都府の南部、八幡市にある廃墟であり、別名はビルマ僧院跡といわれている。この市は京都市のように都会化されておらず、山や森など緑に囲まれた田舎の雰囲気のある場所である。また、この市には日本三大八幡宮の一つである石清水八幡宮があり、映画のロケ地や多くの観光客でにぎわっている。その八幡宮の山に軍人病院はあるとされている。

インターネット上ではこの建物が軍人の病院であり、戦争時代に結核の隔離病棟に使われていたことや病院内にはカルテが散乱しているといった話がまことしやかに流れている。軍人病院の付近では2010年8月24日に16歳の男性が線路内に入り、電車にはねられ亡くなった電車事故があった。この事故のため、インターネット上では心靈スポットとして定着してしまった。

私たちは2017年8月に上記の問題を調査するために、京都府八幡市に向かった。軍人病院があるとされる場所は現在、封鎖されていたため直接入ることができなかったが、近隣の住民の方から話を聞くことができた。それによると、軍人病院とは昭和後期に計画された宗教公園が反対に伴い、頓挫したものが残ったものにしか過ぎなかつた。病院といわれている理由を質問すると、はっきりした理由はないことが分かった。もし病院といわれる理由があるとするならば、軍人病院が建てられて時間があまり経っていないため、建物が

新しく清潔に見えたからで、建物の壁の一部がタイルで作られていてそれが病院に見えるためだという。さらに「軍人」という言葉がついた由来を尋ねると、その理由は近くに陸軍や海軍について記した石碑があるからだと言われた。また、2010年に起きた電車事故の原因は夜で見通しが悪いために起きた事件で、心靈的なものはなかったという。

ロシア病院と軍人病院を比較すると、両方に共通する戦争のイメージは地域から生まれたもので、前者では戦争当時の火薬庫、後者では建物近くにある石碑が原因であった。病院という言葉を選択したことが結果として、心靈スポットの名前として定着した理由は、病院はもっとも死と近い場所であり、生命を救われるというイメージの反面、生命を操作されるのではないかという恐怖がつねにつきまとう場所だからではないかと思われる。

このように、廃墟から心靈スポットに変質するまでの過程を見ていくと、噂の発生は、その元になる事実から発生するのではなく、周囲の環境や史実などの間接的な事実によるもの、またそれらが元になって起こる人々のイメージや集団意識が関係していることがわかる。

現代の日本には多くの心靈スポットが存在する。都会から田舎まで全国各地に点々と存在し、場所は墓地や廃墟などの一般的なものから、果てはトイレや公衆電話までと場所を選ばない。では心靈スポットというものを負の存在、あるいは毒とするのなら薬となるものは何となるか。パワースポットと呼ばれるものが、それに当たるだろう。パワースポットとは、一般的には訪れることで運気が上昇する、修学や子宝、長寿などの恵みを齎す場所を指す。心靈スポットと同様にパワースポットもまた全国各地に点々と存在し、場所も神社や寺社などの一般的なものから、噴水や銅像など地域性に富んでいる。

最近、日本ではパワースポットが人々の間で流行するという現象が発生している。聖地論研究の第一人者、岡本亮輔は、その著書『聖地巡礼』(中央公論社、2015)で、パワースポット生成のプロセスを、再掲示型、強化型、発見型の三つに分類している。再掲示型とは伝統的な寺院等が改めてパワースポットと言い換えられることがある。伊勢神社は再掲示型のパワースポットの一つである。ここは毎年多くの参拝者が訪れるが、パワースポットにすることで、誰でも参拝しやすいと報道され、より多くの人が来るようになった。他に天橋立神社、元伊勢籠神社や眞名井神社が再掲示型である。これらのパワースポットは通常の旅行ガイドと同じ形式で紹介されている。これは、パワースポットと言われる神社や寺院が宗教や

歴史を感じさせにくくし、聖地を違和感なく観光の一つにできたために行われる。実際、公的組織がこのように地域の聖地を紹介している。静岡県では、統合基盤地理情報システムで紹介している。このシステムは都市計画や地震被害予測など各担当課の情報を一つの地図で掲示されている。この地図上で県民から集めたパワースポット情報がアップされている。

強化型とは寺院の一部や効能が世間からパワースポットとしてアピールされることである。この例として神奈川県の箱根神社が挙げられる。ここは源頼朝が二所詣として参拝した後、武家の信仰を集めた歴史ある神社である。パワースポットとされている場所は境内にある九頭竜神社新宮である。九頭竜神社新宮では金運守護、商売繁盛、縁結びなどのご利益があるとされている。

つぎに発見型とは、異質な景観や自然環境のある非宗教的な場所がパワースポットとされることである。これは日本のアニミズム的思想により成り立っている。実際に高尾山や筑波山などは寺社を持つ靈山だが、これに関係しない場所でご利益があるとされる。国の特別天然記念物である屋久島の縄文杉は長く蓄積したエネルギーが手に入るとされる。石川県の珠洲岬では世界的に珍しい無気流地帯であるため運気向上のご利益があるとされる。長野県の文杭峠はゼロ磁場の場所であるためエネルギーの集まる場所とされる。このように疑似科学的な場所がある一方で清州公園のような別の発見型がある。ここでは元々織田信長の像が置いていたが、信長の妻の濃姫の像を隣に置かれた。そのため、夫婦の絆やプロポーズなどのパワースポットと宣伝されている。このようなパワースポットが多くなることは発見型の特徴である。これらの特徴から、パワースポットという言葉により宗教的意識を持たせずに宗教的な行為と一体感を生じさせることができると考えられる。

パワースポットとは人が想像で作り出したものである。例えば人々にパワースポットと呼ばれている明治神宮では、運気が向上するなど、その場所に元からは存在していなかった恩恵が作り出されることもある。現在、天橋立のように多数の人々が、恩恵を目的として、パワースポットを訪れているが、なぜパワースポットは広まったのだろうか。日本人の人々は、神社に行くがクリスマスを祝う。このように、宗教は混在した姿をとるのが常である。宗教が柔軟な形態をとるために、パワースポットという付加価値を神社に対して与えることも可能になったと考えられる。

現在戦争などがなく、医療機関が発展したことでの平均寿命が伸び死の恐怖が遠くなつたとされるが、すでに触れたように、それらへの隠れた恐怖が心靈スポットの名称に表れていた。つまり死

の恐怖は消えていない。ただ、形式的な宗教が衰退したため、死後存続する靈魂だけでなく、神のような人格的存在への信仰は衰退している。しかし、超自然的な現象の信仰はあまり減少していない。このために、パワースポットのような、神や靈魂を介さずに超自然的な影響を受けることのできる空間が「作り出された」のではないか。これは心靈スポットも同様であろう。

死への恐怖や幸運への希求は、人格的存在ではなくスポットという「空間」を経由して語られる。神や靈魂はもはや具体的に描けないが、善かれ悪しかれ超自然的な影響力の存在は信じられているという現代人の宗教性を反映していると言えるのではないか。

4.簡単な補遺 舞鶴の宗教と今後の研究について

4.1 白屋町について

舞鶴高専の住所は、舞鶴市白屋 234 番地である。周辺は、今世紀に入って住宅が増えてきたものの、以前は農家と田畠が続く田園風景であった。丹後から若狭へつながる古代の密教文化圏があったということは想像しにくいほど、変哲のない風景である。

しかし、近代になって、舞鶴に軍港が建設されるとこの周辺の経済や社会も大きく変化していく。その最たるもののが昭和 14 年から始まった第三火薬廠の建設である。それによって、ここに元々あった集落は強制移転を余儀なくされている。つまり、舞鶴高専の前に第三火薬廠があり、さらにその前には周辺と同様の農村地帯であった。

ところで、高専前のバス停の背後には小さな丘がある。この丘を回り込む細い道があり、そこを折れて丘の向こうにいくと、丘の中腹に小さな無住のお堂がある。国道から隠れた場所にあるために、気がつく人も少ないが、石仏や墓石の並べられた参道、お堂から見下ろす隠れ里のような家並みは印象的である。古い伝統的農村のように見える。しかし、この地区は、第三火薬廠の建設によって生まれた、新しい村である。

このお堂は薬師山慶香庵といい、この集落は白屋町という。舞鶴の地図をみると舞鶴高専のある白屋のすぐ隣に、この白屋町という地名がある。同じ地名がなぜ隣接してあるかといえば、海軍によって立ち退かされた人々が新たに作った集落だからである。『朝来村史』によれば、第三火薬廠が出来る前の白屋の土地は、日当たりも風通しもよく、地味も肥え、非常に暮らしやすい土地であったという。住居を移すだけでなく、長年耕してきた農地を離れて、他に生計の手段を求めるか、あるいは新たな田畠を耕し始めるか、いずれにし

ても面倒な作業が待っていた。多くの家が近隣の場所に住居を移築し、それで出来たのが白屋町であった。さらに、住民は、白屋の集落と、その歴史と記憶も残そうとして、集落にあった薬師堂と共同墓地を現在地に移したのである。この薬師堂も、この附近の仏教文化を反映して、かなり古い歴史があった。郷土史家、松岡徳二氏の『白屋の薬師堂と佛たち』(松岡徳二、1996)に詳しいが、もとは舞鶴高専の北にある大師山という丘の麓、グリーンスポーツセンターのスキー場のあたりにあって、平安時代に遡る薬師如来や毘沙門天などの九体の仏像があったという。海軍の工場建設に伴い、民家47戸は住家を解体し、墓を掘って先祖の骨を拾って移転し、薬師堂は現在地の白屋町小字堤136番地に移された。戦後、「十二神薬師如来由来地料覚控」(天正10年、1583)、「薬師仏脇立不動毘沙門建立勸化帳」(文禄3年、1594)という古文書が出てきて、薬師山慶香庵という正式名称が判明したという。庵には慶香行者なるものが住持し、織田信長が1582(天正10)年2月2日に500石余りを寄進したとされる。天正6年、信長と細川幽斎の争いで松尾寺の堂宇が全焼した後に寄進を行っていることからして、信長は松尾寺への対抗勢力として支援したのかもしれない。

白屋町(そしてその元の白屋集落)が古い歴史を隠しもった地域であることは以上でもわかるであろう。

さらに、宗教民俗の面からは、この地域では珍しいものが保存されている。現在は喫茶店「こもれび」になっている古民家には、「廐猿」と呼ばれる猿の頭骨が保存されている。お守りとして猿の頭蓋骨を廐にまつる風習は、東北が盛んとされていて、京都府北部では珍しい事例ではある。松尾寺や中山寺などの馬頭観音分布とも関係するかと思われるが、現所有者もよく分からぬそうである。これについては、薮内紫音「廐猿信仰の歴史的変遷と祭祀形態の転換期における頭骨の意味」『人間文化学部学生論文集』(京都学園大学、2012年)に詳しい。

ところで、舞鶴高専の周辺にはもうひとつつけ加えておくべき、戦後の物語がある。三島由紀夫『金閣寺』で、主人公が中学生時代を過ごした場所がこの周辺になる。主人公は、安岡に下宿し、若葉の頃に西日のあたる丘を見て、金閣寺を想起したという設定になっている。さらに地元、若狭出身の水上勉は、三島とはまったく異なる視点から『金閣炎上』を書いている。成生、安岡、杉山、松尾寺など、この近辺の地名が並ぶ。こうした文学的視点からの研究調査も興味深いテーマだろう。

4.2 西舞鶴の宗教

舞鶴といつても、高専周辺から大浦半島から若狭にかけての農村・漁村地帯、軍港建設によって成立した近代の都市、東舞鶴、そして近世に城下町、港町として整備発展した西舞鶴は、宗教文化においてもまったく別の顔をもっている。高専周辺はすでに述べたように、古代からの仏教伝統を秘めた地域であり、東舞鶴は明治に入って、軍港開設後に仏教宗門や新宗教などの宣教が盛んに行われた地域である。これについては、多岡佳祐「軍港開設と舞鶴の寺社の動向について」東昇編『舞鶴地域の文化遺産と活用 京都府立大学文化遺産叢書 第11集』(京都府立大学文学部歴史学科、2016)という研究がある。そして、西舞鶴は近世の城下町である。ここでは、2019年にイクスカージョンを行った西舞鶴について、簡単に触れておきたい。

現在の西舞鶴は、西から愛宕山、高野川、国道27号線、JR舞鶴線、伊佐津川に区切られていて、愛宕山をぐるりとめぐって寺社が集中し、高野川の左右に蔵と町屋が並び、国道27号線とJR舞鶴線の間に田辺城跡がある。

この宗教地帯は、寺社ロードとも言えるほど、愛宕山の山裾沿いにきれいに寺社が並んでいる。宮津側から名前を挙げていけば、見樹寺(浄土宗、開創1600年)、松林寺(浄土宗、開創933年)、淨土寺(浄土宗、開創不明)、妙法寺(日蓮宗、開創16世紀)の4箇寺が愛宕山の北側にまとまって存在する。見樹寺は田辺藩牧野家の菩提寺である。そこから少し離れて、山の西側に笑原神社(式内社)、桂林寺(曹洞宗、開創1401年)、本行寺(法華宗真門流、開創1553年)、朝代神社(旧府社)、円隆寺(真言宗御室派、開創11世紀)がある。笑原神社は、元伊勢の伝承も残る古社、桂林寺は中本山の格式ある寺院、朝代神社は西舞鶴住民に最も親しまれている神社であろう。西舞鶴旧市街の寺院は愛宕山の山裾に集中しているが、山から少し離れた町中にある寺院が瑞光寺(浄土真宗本願寺派、開創1594年)である。ここは一箇寺で小さな門前町を形成し、「寺内」という地区名にその名残をとどめる。

また、桂林寺から朝代神社にかけては、かつては朝代遊郭があり、今世紀最初頃までは遊郭の建物も多く残っていたが、今は一変している。

さて、これらの中でも特に興味深いものが、円隆寺である。元来は天台宗で、皇慶(977-1049)の開創とされる。一時は多くの坊を抱える寺院であったが、1595(文禄4)年、土砂崩れのためにほとんどの建物を失う。その後も、江戸時代に火災に遭い、地元の引土地区の町衆によって本堂の再建を果たしている。その後、天台宗から真言宗に転宗している。豪壮な本堂は、松尾寺に匹敵

する大きさである。また、阿弥陀如来、薬師如来、釈迦如来の三尊など、鎌倉以前の仏像をまつる。

この寺院の興味深い点は、いまも庶民信仰が息づき、いろいろな聖地の複合体になっていることである。大師堂、八十八所の写し靈場、聖徳太子をまつる太子堂、出世稻荷、本堂裏には滝不動がある。裏山の山頂にある愛宕大権現は、この寺が護持しており、愛宕山の聖地性が、このような複合的な性格をもたらしているのかもしれない。

7月23日には「本堂さん夜祭」という祭がある。本堂で行われる「愛宕大権現」のお祭りを中心であるが、僧侶というよりは地元主体の祭で、同時に、建築組合が太子堂、引土の地元氏子が出世稻荷、行者講が滝不動でお祭りを行っている。行者講は、舞鶴行者講（ここは吉野の竹林院（当山派）の関係）、引土行者講（洞川の龍泉寺（本山派）の関係）に分かれているが、いずれも吉野の大峰山へのお参りを行事とする。濃密に庶民信仰が重なり合い、現代の信仰の場所としても興味深い場所である。

なお、新宗教に目を転じれば、西舞鶴には、天理教、金光教、大本教、戦後は創価学会や真光の道場などがあり、キリスト教系では聖イエス会やエホバの聖人の集会所もあるが、近代宗教史からすると、珍しい教団の支部が二つ置かれている。ひとつは堀上地区にある「真生会」という団体である。ここは北海道出身の桑田道教（源五郎、欣児）という、元精神療法家として活躍した人物が戦後立教した団体で、北海道に本部（河西郡芽室町本通4丁目24-1）と湯河原に事務局（神奈川県足柄下郡湯河原町中央1丁目7-13）がある。桑田は、戦前多数の療術家を育てた人物で、いまなお鍼灸や指圧の治療家に絶大な人気を誇る。舞鶴支部は、その数少ない地方支部のひとつで、戦後しばらくはかなり積極的な活動を行った模様である。もうひとつは「真の道」という教団で、靈媒であった萩原真が塩谷信男と結成した心霊研究グループ千鳥会を元に戦後創設した宗教法人である。萩原は、浅野和三郎や小田秀人といった大本教系心霊研究家の系譜を引く靈媒であり、

鎮魂帰神の法をアレンジした交霊術を行っていた。現在、全国に12カ所ある支部の内のひとつが舞鶴の下福井にある。「真生会」「真の道」のいずれも、もとは靈能力の養成や交霊術などをを行う、宗教団体というよりは心霊団体であり、戦後もなく宗教法人化している。性格のよく似た、いずれも小規模の団体が、他の都市ではなく、西舞鶴に支部を置いたという事実は不思議な感はある。まったくの想像に過ぎないが、古代の密教から近世の講を経て近現代にいたる修行の文化が背景にあったのかもしれない。

北近畿の他の小都市には、大本教という戦前最大規模の新宗教を生んだ綾部や龜岡があり、丹後には近世からの文化の蓄積を誇る宮津、そして若狭には有名な古刹を抱える「海の奈良」と言われる小浜がある。それらと比べると、近代の舞鶴は軍港という性格が優先され、商業の中心地であった福知山と並んで世俗的な都市とみられがちであり、実際、宗教史上で綾部や小浜のように飛び抜けたところはない。しかし、宗教都市として見る場合、古代的密教文化（丹後・若狭）、近世的都市宗教（西舞鶴）、近代的宗教布教（東舞鶴）と三つの層がコンパクトにまとまっているという点では興味深いフィールドとなっている。

以上、5年間の巡礼、学びのプログラムについて、思いついたままに書かせていただいた。これでプログラムは終了するが、最終年度の教訓としては、いつも見慣れた退屈な風景も少し視点を変えると、豊かな歴史への入り口が見えてくるということである。残念ながら、私は入り口を触るだけで終わってしまったが、いずれ明らかにされることを期待して擱筆したい。

(2019.12.6 受付)



図2 舞鶴高専周辺の寺院地図

An Essay on the Pilgrimage Research sponsored by COC+

Motoyuki HAYASHI, Yuya FUJITA, Daiki BITO and Shin'ichi YOSHINAGA

*Corresponding author: yosinaga@maizuru-ct.ac.jp

Abstract: "Junrei Manabi no Proguramu"(the Pilgrimage Research Program) is a series of educational events and lectures from 2015 to 2019, for the purpose of letting students discover the values and meanings of their own regional religious cultures through "pilgrimage" and "sacred places". This program was conceived because Matsunō-dera Temple, which is no. 29 of Saigoku 33 Kannon Pilgrimage, the oldest pilgrimage route in Japan, stands in Mt. Aoba just behind our college. These have been sponsored by COC+ (Program for Promoting Regional Revitalization by Universities as Centers of Community).

This essay consists of three parts. In the first part, the events related to this Pilgrimage Program are reported, including "Junrei Sinpojumu" (Symposium on Pilgrimage) held on July 1 and 2, 2017, which took place at Maizuru Nishi Shimin Pulaza (Community Center in Nishi Maizuru) and Matsunō-dera. Some reports by students are summarized in this part. The second part deals with a terrifying urban legend about the imagery "Rosia byoin" (Russian Hospital) which is thought to be situated to the north of our college. This chapter is written by three students, Motoyuki Hayashi, Yuya Fujita, Daiki Bito. And the last part is about the pre-modern history of religions near our college, and the survey of folk religions in Nishi Maizuru.

Key words: Pilgrimage, Sacred Place, Matsunoo dera Templet, Urban Legend